キケロの老年論

――『老境について』(De senectute)をめぐって

秋山　学

一　『老境について』解題

ローマの政治家・哲学者・弁論家として名高いマルクス・トゥッリウス・キケロ（B.C.106-43）による著作の一つに『老境について』と題された対話編がある。執筆されたのはおそらく紀元前四四年の春ごろであったと思われ、それはちょうどユリウス・カエサル(B.C.100-44)がブルートゥス(B.C.85-42)らの手にかかって暗殺されてから間もない頃であった。当時キケロ、ブルートゥスらを中心とする共和派は、寡頭制を経て独裁をめざそうとするカエサルなどの一派に対し、古えのローマ共和制を擁護して論陣を張っていた。だがカエサル亡き後、その養子オクタウィアヌス(B.C.63-A.D.14、後の皇帝アウグストゥス）がアントニウス(B.C.83-30)らとともに第二回三頭政治を組織して(B.C.43)、ブルートゥス一派をフィリッピの戦い(B.C.42)で破り、ローマは以後帝政への道を進んでゆく。その過程でキケロも、アントニウスの遣わした刺客に追われ、紀元前四三年に暗殺される（自害したとの説もある)。六三年の生涯の中で、この『老境について』が記されたのはほぼ六二歳の頃、キケロ最晩年の作品の一つと言える。

キケロは、哲学史上の分類ではエピクロス派・ストア派・アカデミア派を折衷した折衷学派に属し、学説的に特記すべき点のない人生哲学者であるとされる。だがギリシアの哲学用語をラテン語に翻案し定着させて、以降近現代に到るまでの西洋哲学の基礎概念の確立に貢献した点は高く評価されねばならないだろう。この『老境について』はキケロの円熟したラテン語で記されたローマ散文文学を代表する作品の一つであり、全二三章（小区分では八五節）からなる（以下『老境について』における箇所指示は、章区

分をローマ数字で、節区分をアラビア数字で表すことにする)。老キケロの人生哲学が、かつて古き善き時代のローマ精神を体現するマルクス・ポルキウス・カトー(B.C.234-149)の口を通して語られている。

カトーは十七歳で兵役に就き、三六歳でプラエトル(法務官)、三九歳でコンスル(執政官)となった。著作としては、この『老境について』でも語られるとおり(e.g.,XI-38)、『起源論』(Origines)を遺したと伝えられている。彼はギリシア文学・哲学の研究に熱心であったことがこの『老境について』でもほのめかされるが(cf.XI-38)、『起源論』にはそういった彼の博識があちこちに散りばめられていたものと思われる。

この『老境について』はカトーの死の直前(B.C.150/149)の頃に場面設定がなされている。このときカトーは八四歳、対話相手として登場するスキピオ、ラエリウスはともに三五歳の頃である。このスキピオとはいわゆる小スキピオ(スキピオ・アフリカーヌス)、マケドニア征服者であるルキウス・アエミリウス・パウルスの子であり、紀元前一八五年の生まれである。一方ラエリウスとはガイウス・ラエリウス、先のスキピオとほとんど同年で、キケロによって同時期に記されたもう一つの対話編『友情論』(De amicitia)における主要登場人物でもある。

『老境について』は全体として、老年は自然の摂理であること、失うものもあるが、またそれに相応しい役割と喜び(例えば読書や学問、農作業)があること、魂は不死であるがゆえに老年は「永遠の生への序曲」であることなどを説いている。アテナイ人クセノフォン(B.C.430-355)の『家政論』(Oeconomicus)を彷彿とさせる文体で書かれたこの短い対話編では、ちょうど同じクセノフォンの『キュロスの教育』(Cyropaideia)の中で描かれるキュロス大王と同じようにカトーが理想化され、賢明で人間性にあふれる「農夫」として特徴づけられている。

なお訳出等に際しては、テキスト・注釈書としてJ.G.F. Powell (ed. with Intro. and Comm.), Cicero; Cato Maior De Senectute, Cambridge 1988.を使用し、英訳としてW.A.FalconerによるLoeb版(Harvard 1923)を参照した。すでに出版された邦訳としては生活社版・齊藤為三郎訳(1943)、および岩波文庫版・吉田正通訳(1950)があり、両書ともに注をあわせて参照させていただいた。

二 『老境について』本文より

まずキケロによる友人アッティクスへの献辞がある(I-1〜3)。アッティクス(B.C.109-32)は『友情論』においてもキケロからの献呈先とされている友人であり、彼に宛て

たキケロの書簡が多数遺されている（『アッティクスへの書簡』）。キケロとの友情は幼少時代に始まり、紀元前四三年にキケロが亡くなるまで保たれた。この冒頭の献辞の中でキケロは『老境について』執筆時の軽やかな楽しさを次のように表現している。「わたしにとって、この書の執筆は極めて楽しいものだったので、あらゆる老境の煩わしさが取り除かれたばかりでなく、老境が過ごしやすくさらには喜びに満ちたものとなりました。それゆえ哲学とは、どれほど称賛しても決して十分足りえないものだと思います。哲学に従う者は、人生のあらゆる時期を思い煩いなく過ごすことができるのですから」(I-2)。

続いてスキピオ、ラエリウスとカトーとの対話が第二章より始まる。若い二人はまず、カトーが老年を送っているその高貴な様に賛辞を送る。――（スキピオ曰く）、「マルクス・カトー様、わたしはここにいるガイウス・ラエリウスと共に、いついかなる時にも、あらゆることに関してあなたの秀でた完璧な知恵に驚嘆しているのですが、とりわけそう思いますのは、あなたにとっては老境というものが少しも苦痛になっていないように感じることなのです」(II-4)。――（ラエリウス曰く）、「わたくしどもは、もとより老いることを望み、また欲しておりますからには、どのような心掛けによれば次第次第に寄る年波にいともたやすく耐えることができるのか、あらかじめあなたから学んでおければ感謝の念に堪えません」(II-6)。カトーは答える。「老境に対する最も相応しい武器とは、諸々の徳に関する学知と鍛練である。それらが一生かかって蓄え育まれるならば、長く生き幾多の経験を積んだ人の場合、驚くべき実りをもたらす」(III-9)。カトーは更に続けて、理想的な老人としてクィントゥス・ファビウス・マクシムス・クンクタートルの例を引く。マクシムスは紀元前二〇九年、ハンニバルに占領されていたイタリア南部の町タレントゥムを、ゲリラ戦術により敵軍を疲弊させることでもって奪回し、その戦術の故に「クンクタートル」（引き延ばし将軍）の異名を得た知将である。「彼は極めて高齢であったにもかかわらず、若者のごとく戦闘に参加し、少年のように暴れまわるハンニバルをその忍耐でもって鎮圧したのである」(IV-10)。続いて、老境に至りつつも活躍を続け、長命を全うしたギリシアの知恵者たちの例が挙げられる。「平穏にして柔和な老境とは、静けく浄らかに、そして高雅に過ごされた生涯の賜物である。伝えられるところによれば、プラトン(B.C.427-348)の老境がそうであったと言う。彼は八一歳にしてなお書を著しつつ死んでいった。またイソクラテス(B.C.436-338)の老境もそのようなものであった。彼は『パンアテナイコス』と題した著書を

九四歳で執筆したと言っており、その後なお五年間生きたのである。また彼の師、レオンティニの人ゴルギアス(B.C.485-377)は一〇七歳の生涯を全うし、しかも自らの勉学と著作を止めることは決してなかったという。なぜこれほどまで長くこの世にいたいのかと問われたとき、彼はこう答えた。〈わたしは自分の老境をとがめるべき理由を、まったく有していないから〉と。実に明快な回答であり、学を修めた人物に相応しいものと言えよう。愚かな者どもこそ、自らの悪徳やおのれの欠点を老境ということに負わせるものだからである。……かのエンニウス(B.C.239-169、ラテン文学史上最初の叙事詩人)にあっては、そのような愚かしい様ではなかった。

あたかも、かつてオリュンピア競技でしばしば優勝した駿馬が、今や老齢のために衰えた体を憩わせているがごとく

(『年代記』断片三七四〜五行)

彼は自分の老境を、かつての駿馬にして勝ち馬の老境になぞらえているのだ」(V-13,14)。

次いでこれより本論に入り、老年が憐れむべきものに思われる理由について、四つの理由が挙げられる。「一つ、〔気力が衰え〕仕事の遂行から遠ざかる。二つ、肉体が衰弱する。三つ、あらゆる快楽を享受することができなくなる。四つ、死が近づく」(V-15)。以下、この四項に関してカトー(キケロ)の老年論を概観してみることにしよう。

まず「老齢は、人を活動的な仕事から退かせる」という批判に対して(VI-15〜20)。カトーは、気力の代わりに分別が備わることをもって反駁する。「偉大な事業というものは、腕力や瞬発力や敏捷さなどによってではなく、思慮、威厳、判断力によってなし遂げられるのだ。このような適性は老境にあって奪われることがないばかりか、むしろ増し備わってゆくものなのだ」(VI-17)。「実に、向こう見ずとは若き青春のなせる業、思慮は老境の賜物である」(VI-20)。

記憶力の減退(VII-21)も老化の一現象であるが、カトーは学びつつ老いゆく偉大な人々の例を挙げてこれに反駁する。まずギリシアの悲劇詩人ソフォクレス(B.C.496-406)の例が引かれる。「ソフォクレスは極めて高齢に到るまで悲劇を作った。彼は劇作への熱意ゆえに家庭のことを蔑ろにしているように思われ、息子たちによって裁きの場に訴えられた。それはちょうどわたしたちの習慣で、家事を取り仕切ることのできない両親が、家産の扱いを禁ぜら

れるのが常であるように、彼をいわば精神的無能力者として、裁判官たちにより家事から退けてもらおうとしたのである。するとこの老人は、ちょうど手にしていた最新の作品『コロノスのオイディプス』を裁判官に向かって朗読し、果してその詩が精神的無能力者のものと思われるかどうかを尋ねたと伝えられる。かくしてこの詩の朗読によって、裁判官の決議により彼は赦された。ではいったいこのソフォクレス、あるいはホメロス（紀元前八世紀頃）やヘシオドス(B.C.750-680)、シモニデス（B.C.556-468)、ステシコロス(B.C.630-556)、また上述のイソクラテスやゴルギアス、また哲学者たちの大御所ピタゴラス(B.C.582-500)やデモクリトス(B.C.460-370)、またプラトンやクセノクラテス(B.C.397-315)、またその後のゼノン(B.C.337-265)やクレアンテス(B.C.330-231)、あるいはお前たちもローマで見かけたであろうストア派のディオゲネス(B.C.412-323)といった人々に関して、老境というものが各々の者の研究意欲を黙させるように強いたであろうか。否むしろ、すべてこれらの人々の場合には、熱意ある仕事の遂行がその生に伴っていたのではないだろうか」(VII-22)。さらに、多くの人々は老齢にあってもなお知の探究を持続するとされ、その例としてソロン(B.C.638-558)が引かれる。「例えばソロンは〈自分は年老いてから、日々何かを学び続けている〉と自作の詩で誇らかに歌っているのをわれわれは知っている。このわたしもまたそうしてきた。年老いてからギリシア文学を学んだのである。言わば長い間の渇きを癒そうと望むかのように、貪るように勉強したのだから」(VII-26)。

次いで、第二番目の「老齢にあっては肉体が衰弱する」という批判へと論題が移行する(IX-27〜XI-38)。体力の減退に対し、カトーは老齢にあっては体力が必ずしも必要とはされないことをもって反駁する。「〈弁舌にあっては〉音声の響くような調子は、どういうわけか知らないが老境に至ってから輝きを放つものである。わたしはそれを実に今に到るまで失っていない。……静かで落ちついた語り口こそ老人には相応しく、雄弁な老人の整った穏やかな話し方は、それ自体、人が耳傾けるようにと促すものである」(IX-28)。そしてホメロスの『イリアス』に登場する老将ネストールの例が引かれる。「ホメロスの中で、ネストールが頻繁に自分の美点について公言するのはよく知られていよう。実に彼は三世代以前の人々にも会っていたのだ。彼が自分自身について真実を公言する以上、あまりにも大胆だとか、饒舌だと思われないだろうかと恐れる必要はなかったわけである。実に、ホメロスが言っているように〈彼の舌からは蜜よりも甘い言葉が流れ出た〉(cf.『イリ

アス』一、二四九）のだ。だがその甘美さを得るために、彼は何ら肉体の力を必要としなかった。しかも、かのギリシア軍の総帥（アガメムノン）は、アイアス（注・アキレウスに次ぐギリシア軍の強者。豪腕をもって聞こえる）に似た者ではなく、ネストールのような者を十人でも欲しいと望んでいる（cf.『イリアス』二、三七二）。もし本当にそれが叶えられたならば、トロイアはすぐにも陥落するであろうことを疑わなかったのである」（X-31）。結局「少年期には脆弱、青年期には大胆、壮年期には重厚、そして老年には円熟というように、各時期に応じ、自然に従って身につくものを備えねばならない」（X-33）として、それぞれの年齢に相応しい適性が求められる。

続いて威厳ある老年時代を送った人として、アッピア街道を建設したことで知られる紀元前四〜三世紀の人アッピウス・クラウディウス・カエクスの例が引かれる。「アッピウスは盲目で老齢にあったにもかかわらず、四人の屈強な息子、五人の娘、あれほどの大家族、あれほど多くの顧客を支配していた。それは彼が、あたかも弓のごとくに張り詰めた精神を維持していたからである。また衰弱しながらも老齢に屈することがなかったからである。彼は自分の家族たちに対して威厳のみならず、権限をも握っていた。奴隷たちは彼を恐れ、子供たちは彼を畏怖していた。皆が彼を大切にしていた。この家には父祖伝来の流儀と規律が保たれていた。もし老境〔にあるもの〕が自らを保持し、自らの権利を保ち、誰にも隷属することがなく、息を引き取るまで自らの領域を治めるならば、老齢というものは貴いものとなるだろう。わたしはどこか老熟したところのある若者を尊重するのと同じように、どこか若者風のところがある老人を尊重する。そのような若者気質を追い求める老人は、確かに肉体的には老人であるかも知れないが、精神においては決して老いることはないだろうから」（XI-37）。この章の末尾では「常に労作あるいは仕事に打ち込んで生きている人は、いつ老境が忍び寄るのかまったく気づくことがない。このように、人生は次第に意識されることもなく老いへと向かうものであって、直ちに打ち砕かれるようなことなく、時のたつにつれて消えてゆくものなのである」（XI-38）と述べられる。

第三に「老年期には快楽を享受することができなくなり、楽しみが欠けている」という批判に対して（XII-39〜XVIII-66）、カトーは「快楽とは人をそこなう最大の破滅である」とする。「実に、いかなる悪事、どんな非行であろうとも、快楽に対する欲望が犯罪へと駆り立てないものはない。実に、不義や姦淫、またすべてその類の破廉恥へと駆り立てるのは、快楽の誘惑に他ならない」（XII-

40)。さらにカトーは、老齢とは人を青年期の誘惑から救う働きを持つが故に、われわれは老齢に感謝せねばならないとする。「もし快楽というものを理性や知恵で撃退することができないとすれば、われわれは老境に対して大いに感謝せねばならない。なぜなら老境は、なすべきでないことがらを好むことのないようにするからである……」(XII-42)。さらに、老齢期には多くの浄らかな喜びが与えられているとして、例えば対談の楽しみ、会食の喜びが挙げられる。「わたしは会食における喜びを、肉体的な快楽よりも友人間の団欒と懇話に照らして量るようにした。実にわれわれの先人たちは、友人仲間のくつろいだ会食に対して、それが生を結び合わせる働きを持つがゆえに「共宴」(convivium)という名を与えたのである」(XIII-45)。

次いで、特に老齢期における性的快楽の意味に関して、カトーは老ソフォクレスの例を引く。「ソフォクレスは、ある人が年老いた彼に対して、まだ情事に関わることがあるかどうか尋ねたとき、答えて〈とんでもない！　わたしは実際、そういったものを言わば暴君を避けるように遠ざけているところだ〉と言ったという。確かに、そういった類のことどもを熱望する人々にとっては、それを欠くということはおそらく厭わしく、また悩ましくもあろう。だが現に満たされている者たち、飽き飽きしている者たちには、それを享受するよりは欠いているほうが喜ばしいのだ」(XIV-47)。そして老齢における楽しみとして、まず勉学が挙げられる。「これまで名を挙げてきた人々はみな、老齢にあってもなお各々の学業に熱中しているのを、わたしたちは見てきた」(XIV-50)。また農耕の楽しみが語られ、農事について多く著したクセノフォンの書物が推奨される。「クセノフォンの著作は多くの事柄に関し極めて有益である。だからそれらを、いま君たちがおこなっているように熱心に読み続けられるよう、お勧めしたい。家事をいかに扱うべきかを論じている『家政論』と題された書物の中で、農耕が、彼によってなんと豊かに賛美されていることか」(XVII-59)。

最後に、老齢には「死が接近する」とされる第四の批判に対して(XIX-66～XXIII-85)、カトーはまず「死は人生のあらゆる時期に到来すること」を挙げて反駁する。「第四の理由が残っている。それはわたしたちの年齢にある者を最も悩ませ、厭わしいものとしているように思われる点、すなわち死が近づくということである。実際、死は老境から遠く離れてありうべきものではない。けれども、かくも長い人生のうちに、死が軽視されるべきものであるということを悟らなかったような老人があるとすれば、何と哀れむべきことであろうか。死とは、もし人の霊魂をこと

ごとく消し去るものだとすれば、まったく無視して然るべきものであり、一方またもし霊魂を、将来永劫に落ち着くべき場所へと運び去るものだとすれば、むしろ願い求められるべきものであろう。それ以外に第三のあり方としては、まったく何も考えだすことはできない。だから、死後わたしが不幸ではないだろうか、あるいは幸福なのだろうかなどと思い悩む必要がどこにあろうか。その一方、人がまだ若いからと言って、自分は夕刻にも生きているだろうと確信するほどに愚かな者があるだろうか。否むしろ若年の者こそ、わたしたちの年齢の者よりも遙かに多く死の機会を有しているのだ。若者たちは老人よりも病にかかりやすく、より重く患い、一層直りにくい。それゆえ老境に到る者は極めて少ない。もし老齢に到る者がもっと多かったなら、人々はもっと善い生き方をし、もっと賢明な生活を営むことであろうに。分別や理性、思慮などは老人のものだからである。もし老人が世に一人も存在しなかったならば、いかなる国家も存在しなかったことであろう。……さて、死が老齢と若年とに共通のものであると了解されたからには、なぜ死が老境のみに負わされる咎と言えようか。……とは言え、若者は自分が長く生きることを期待できるが、それと同じことを老人は望みえないと言われるだろう。けれども若者の期待も愚かなものである。実際、確かな事柄の代わりに不確かなことを、真理の代わりに偽りを選択することほど愚かしいことがあろうか。――でも老人はだいたい期待しうることすら持っていないではないかと言われるだろう。いや、それ故にこそ、老人は若者よりも善い状況にあるのだ。なぜなら、若者が期待することを老人はすでに成就しているからだ。若者は長く生きたいと望む。老人はもう長らく生きてきた。もっとも、神々よ、人の世のならわしにおいて、何か長いと言えるものがあるだろうか」(XIX-66～69)。ここから、青年よりも老人の方が生に関して大胆になりうるとカトーは語る。「老年には、限界というものは何ら定まっていない。したがって職務の遂行を注意深く果たしうるかぎり、なお死を軽んずることができるならば、人は老境にあっても立派な生き方ができる。かくして老境にある者が若者よりも大胆かつ屈強であるということになろう」(XX-72)。

カトーによれば、死とは次のようなものとして定義される。「全き精神と確かな感覚とを備えつつ、自然がかつて結び合わせたのと同じ自らの作品を解体する時、生命は最も善き終焉を迎える。船や家であれば、それらを組み立てた者が最も容易に解体させることができる。同じように人間も、それを作り上げた自然が最も巧みに解体させるものなのだ」(XX-72)。人間には、死の訪れが何時と分かる

ものではない。「知恵者ソロンの銘がある。その中で彼は、自分の死を友人たちが嘆き悲しんでくれるように望むと言っている。思うに彼は、自分が一族の人々に愛され続けることを望んでいるのだ。しかしどうも、エンニウスの方が優れているように思う。

誰もわたしを涙で飾ってくれるな。
また嘆きをもって弔いをしてくれるな。
(varia, 断片一七)

彼は、死とは嘆かれるべきものではないと考えているのだ。それは死の後に永劫不滅が続くからである。実に、死の意識というものは確かに存在しうるであろう。だが特に老人にとって、それはほんの僅かな時間だと思われる。一方死後の意識とは、望ましいものであるかあるいは全くの無意識かであろう。だがこういったことは、われわれが死を軽んずることのできるように、若いころからよくよく熟考しておくべきことである。そういう省察なしには、誰一人平穏な精神でいることはできない。死なねばならないということは定まっている。だがそれがこの日であるとは定まってはいない。であるから、死があらゆる一刻一刻において迫っているもののように恐れていたのでは、誰が確固たる精神を保ち続けられようか」(XX-73〜74)。

次いで、死に対して取り乱すことのないよう「霊魂の不死」を信ずべきことが、ピタゴラス派およびプラトンの哲学、さらにクセノフォンの著作によって説かれる(XXI-77〜XXIII-82)。「霊魂が不滅ではないとすれば、優れた人の魂ほど不滅の栄誉栄光を目指して精進するということは、決して起こりえぬことであろう。実に、賢明な人ほど平静な精神で死を迎え、愚かな者ほど穏やかならぬ精神で死にゆくのはなぜであろうか。より大きくより遠くまで及ぶ見識を持った精神は、自分がより優れたものに向かって旅立つのを知っているが、視界の曇った精神にはそれが見えないという理由によるとは思われないだろうか」(XXIII-82,83)。カトーが持つ将来への希望の力は次のようにして培われるものである。「かつて多くの学識ある人々がしばしばおこなったように、この世の生を嘆くということはわたしの心に適わない。またわたしは、今まで生きてきたことを悔やむものでもない。なぜならわたしは、自分が生まれたことが虚しかったとは思わないような生き方をしてきたのだから。またわたしは、わが家からではなく旅の宿から出発するような心持ちで、この世から退く。なぜなら、自然がわれわれに宿を与えたのは、しばしの滞在のためであって、定住のためではなかったのだから。わ

たしがかの聖なる諸々の霊の集い、語らいのうちに進み行く、そしてこの群衆と雑踏の世から退く、それはなんと素晴らしい日であろうことか」(XXIII-84)。「わたしは人間の霊魂が不滅であると信じるが、たとえそれが誤っていようとも、わたしは喜んでこの誤りをおかそう。またわたしが生きている限り、わが喜びとするこの誤りを奪い取られたくはない。もしわたしが死んで、ある浅薄な哲学者たちが考えているように、何事も感じないということになったとしよう。ならば一層、わたしのこういう思い違いに対して、かの哲学者たちが嘲笑するのではないかと恐れる必要はあるまい。彼らとて死ぬのだから。そしてなお、もしわれわれが不滅のものとはならないにしても、それでもなお相応しい時にこの世を去ることが望ましいのだ。なぜなら自然は、すべて他のことと同様、生命にも限界というものを有しているからである。人生の老境は、言わば芝居の幕切れとでも言うべきものだ。われわれは芝居に飽きさせることは避けねばならない。とりわけ〈これで十分だ〉という折りには」(XXIII-85)。

こうして「以上が、老境についてわたしが述べたいと思っていたことがらである。君たちもやがてその老境に到り、かつてわたしから聞いたことがらを実際に体験して確かめられんことを」(XXIII-85)との結語をもってこの作品は閉じられている。

以上『老境について』の概要を紹介したが、この作品ではキケロの老年論が、老カトーの口を借りて実践的な知恵として語られている。老境そのものに関する著作は意外に珍しく、この著作は古典としての価値を失っていない。そこに語られる「体力の衰えには思慮分別の成熟をもって対処すべし」「老いてなお学びつづけよ」「農事にいそしみ自然と一体たるべし」「魂の不死を信じて死の恐怖に打ち勝て」などの提言は、現代人にもなお、快適な老年時代を送るために有効なアドバイスたりうるものであろう。